

---

# 蘭の中の教室

初花水色

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

繭の中の教室

### 【Nコード】

N2829S

### 【作者名】

初花水色

### 【あらすじ】

女子高生の“あたし”が授業をさぼって見つけたものは、隠されていた瞳。世界と広く距離をおいて立っている教師と生徒の話。思春期ぼんやりシリアスもの。

1 (前書き)

暗い青春ものです(笑)

見なければよかった。

背筋が凍ったけど、純粋な恐怖とは違う。寄生虫とか、動く微生物を見た時みたいな、見たくないものを見てしまったような感覚。

胸の中に不安感が広がる。

ああ、あれは生きた人間のもつものではないんだ

\*\*\*\*\*

思えばあたしは、ふわふわとした考えを実行に移して生きていた。この高校に入った理由も、姉妹ぐるみで仲良くしてもらってる友人の姉の通っていた高校だからだ。友人の姉の話は愉快で、あたしにはとても魅力的に感じたのだ。彼女の話聞くうちにあたしはいつの間にか彼女の通う高校に進学するのが当然の事のように思えていた。あたしは、大した意思もなくただ一番多く話を聞いていた高校に行く事が普通だと思っていた。勝手にあたしが思った事でも、きつと友人の姉が通っていた高校が不良だらけの工業高校でも、優等生ばかりの進学校でも、目指そうと思っただけに違いない。刷り込み

に近い。

高校でやりたい事なんかなかったけど、中卒で働くなんてあり得ないし、社会にまだ出たくなかった。

あたしは、ただふらふらと進学を決めた。

そうやってふらふらしていたからだろうか。あたしはあんまり仲良く出来る友人がいない、孤独な女子生徒になってしまっていた。

入学してすぐ、うわべだけの友人たちは出来たが、あたしが何か違うな、と思つてつき合うのが面倒になったらぱったり話す人がいなくなつてしまった。

うわべだけのつき合いなんてこんなものだろう。

思春期のあたしはそれなりに寂しかったし、休み時間が手持ちぶさただったけど、仕方がない。あたしから動かないとあたしと話をしたい人間はいないみたいだから。

ところで、この学校はどうしてか体育の際着替えるのは第一理科室という決まりがある。もちろん男女別で、男子は各自の教室だ。あたしは高校の授業に興味がないわりに、授業をサボったりはしなかった。教室を出るのも面倒だから。

でも、体育の時間は別だ。着替えるために理科室へ行き、そのまま空いた教室から出なければいい。男子みたいに教室で着替えなら、教室すら出なくてよいのもっと楽なだけだ。といつてもあたしは頻繁に体育をサボるわけじゃない。

その日あたしは、靴下に穴があいてるって理由でグラウンドに駆け出す元気を失った。室内の体育館での授業ならまだしも野外の授業で靴下に穴があいていたら、砂が素足にまでたっしてしまう。

それに、着替える時に穴を見せたくなかった。靴下に穴って、小学生かよつて思うから。

制服のブラウスより黄色がかったシャツで教室を後にする女子生徒たちを、あたしはスカート製の制服姿で見送った。理科室の床に座つて、教室が空になるのを待つ。

最後の女子がサボりかな？ とあたしの方を見てからドアを閉め

た。

行った行った。

理科室の特殊な机の上に、女子たちの脱ぎ捨てた制服と鞆とあだし。それだけになった。

今日は何をして時間をつぶそう。これとってしたい事はない。なんといつたつてただ靴下の穴を隠すために体育を休んだのだから。始業のチャイムが鳴る。今ごろグラウンドにクラスの生徒が集まっているのだらう。あたしを除いて。

寝転がる。逆さになった窓の外は雲のある晴れた空。楽しくない。あたしは靴下の穴くらいガマンすればよかったと思った。授業をサボってもする事はない。探す気も起きない。

眠ってしまおうと思った。でも、眠れない。

あまりに暇過ぎて、どこかへ行きたくなくなった。そんな事はしないけど。あたしは、けっこう臆病だから。誰か教師に見つかったら厄介だし、目をつけられても困る。行くあてもない。

何も無い。あたしは一体どうしたらいいんだらう。頭が面倒な事を考え出した時、ちよつと大きな音がした。隣りの教室からだ。

あたしは身を起こした。隣りは、第一理科準備室だ。教師が誰か居るのではないか。

苦虫をかんだ。同じサボり生徒でも、教師でも、こちらに来られると困る。なんて思っていたら、黒板脇の準備室へつながるドアが開いている事に気づいて慌てる。隙間程度のものだけど、あたしは緊張した。

しかしどうして、隙間というものは 除きたくなるのだらう。あたしは敵情視察もかねて、足をしのばせ唾をのみ、準備室へのドアへ進んだ。

まさか、教師じゃないよね あたしの期待は、外れる。

生物教師の新原にいばらだった。理科室なのだから道理だ。新原は、やる気のない教師の鑑のような人間だ。理科系の教師のトレードマークの白衣を着ている、長い前髪の男。御簾のような髪で顔を隠してお

り、授業中以外にしゃべっているのを見た事がない。授業の必要最低限の言葉しか口にせず、生徒に注意などしないので私語の多い授業となる。

おそらくは教師という仕事に興味がないのだ。あたしが生徒という仕事に興味がないのと同じように。だからといって親近感はない。一部の女子のように気持ち悪いとは思わないが、改めて見るとえもいわれぬ怪しさの漂う人間だ。

新原は、あたしの視線にも気がつかずに立っていたかと思うと、突如その足を蹴り出した。対象はゴミ箱、ぼごと音を立ててゴミ箱は壁に叩きつけられた。

息をのんだ。声をあげなかったのは誉めてもいいけど、けっこう驚いた。

だって、新原というと今やたらと世間で吹聴されている草食系みたいな、人畜無害で存在感がまるでない人間に見えていたからだ。何を楽しみに生きているんだか分からないような、風に飛んで行きそうな教師。世間に執着などなくて、だからこそ何かに憤るなんて事は忘れてしまったような。

勉強に煮詰まった受験生のように、ぐしゃぐしゃと新原は自分の髪をかき上げた。

ゴミ箱を見下ろす、新原の瞳。

見なければよかった。

隠していたのが正解の、瞳は冷たい。それなのに、目が離せなかった。まるで猛禽に睨まれたみたい。

先に目を離れた方が負けてしまうかのよう。背に机があたり小さくない音を立てる。

ドアの向こうで何かの動く気配がした。驚いてあたしは立ち上がる。

「誰かいるのか」

新原の声、あたしは意味もなく準備室のドアに背を向ける。逃げ

る時間はなかったから、せめてもの行為。

教師が誰もいないはずの理科室に踏み込む。あたしは言い訳を考える。そんなの通用しない状況下だけど。

「あの、えっと……」

そろそろと振り返ると前髪で瞳が隠された生物教師が立っている。目をそらしてしまった、前髪の奥のものは見えなくなっているのに。口元だけでは新原の表情は分からない。まつすぐに引き延ばされた唇は無表情に近い。そしてその口が開く事はない。

あたしは困った。普通、教師は生徒のサボりを見つけたら説教をしないまでもどうしてここにいるのか、口先だけでも注意なりしておくような存在だ。

新原ならやる気のない教師だから頷けるが、先ほどのゴミ箱蹴りと前髪の下が得体の知れないためにあたしは何も言えなくなっていた。

平均台の上でかち合って動きが取れないみたいに、互いに均衡と沈黙を保っていた。

せめて去ってほしい、やる気のない教師なら生徒を無視してやる気のなさをアピールしてくれてもいいくらいなのに。

「す……すみません。あたし、具合が悪くって体育休んでるんです」  
しびれをきらしたあたし、常套句だが完全には疑いにくいセリフを口にする。

表情が見えなくっても、新原が何かに気がついたようにはつとしたのが分かった。

「そうか、この教室は更衣室代わりに使われているんだ……」  
机の上の鞆を見て今気がついたというように新原はつぶやく。ぼそぼそして、低く聞こえにくい声だ。授業中と一緒の声音だが、こんなに近くても変わらない。

あたしとしては、まさかそんなリアクションが返ってくるとは思ってなかったから、なんて続ければいいか分からなくなった。

「…体調が悪いなら、保健室へ行った方がいいんじゃないのか」

ごく当然の言葉が彼の口から出てきた。まるで生徒を気づかう教師のようなセリフ。その通りなのだけど、新原にはまるで似合わないどころかまさかそんな事を言われるとは思ってもいなかった。

「……はい、そうですね…。そう、します」

あたしはもう、逃げるしかないと考えた。気まずい空気にはうんざりしていたし、何より草食教師の荒っぽい行為をのぞき見た後ろめたさと罪悪感でその場所から早く逃げ出したかった。

いい口実を得てあたしは早足で理科室を飛び出した。去り際に、チラリと見た新原の瞳はやはり長い髪に隠されていた。

けつきよく駆け込んだのは保健室じゃなく女子トイレだった。トイレの個室は落ち着く。あたしの密かなサボリスポットの一つだ。体育の授業が終わるまで個室の一つを占拠していた。

正直、一瞬にも近かった。だからあたしは正確な新原の顔を思い描けない。でも、見なければよかった、という思いだけは胸の奥底に岩のように沈んでいった。

死んだ魚のような瞳　そんな表現に近いが、新原の瞳はもつと他の昏いものを、忌避すべき何かをたたえていた。

あたしはずっと、それを振り払おうとしていたのだけど、他に考えるべき事柄がないせいもあって不可能だった。

終業のチャイムが鳴って、やっとあたしは意識を他所にやる事が出来た。

教室に戻ると、着替え終わった男子生徒と女子生徒たちが集まりはじめていた。

きつと、普通の高校生なら先ほど驚いた事象などは友人などに話すのだろう。あたしには特に話す相手がいなかったから、尚更頭からあの出来事は離れていかなかった。誰かに理解を求めたいためではなく、気を紛らすために話してしまいたかったが、わざわざそんな話をされては首をかしげる相手くらいしかない。

仕方がなしに次の授業の教科書を広げる。きつと授業もいつも以上に集中出来るに違いない。

開いた教科書の科目は　生物。

前から三番目、右から数えて二番目。そこがあたしの席だ。

気さくな教師が雑談混じりに言う事には、教壇からは前の二列の

席は近すぎるためにかえって生徒の様子が見えにくいそうだ。後ろの席ほどよく見通せる。

あたしの席は、なんとも微妙なところだった。あの新原が、教室の隅々までに目を通しているとは思えないけど、あたしは顔を伏せて眠るフリをした。

考えるな、考えるな。ただちょっと怖いような変なような目を見ただけ。

あたしは意味もなくシャーペンの芯を長く押し出して、力を加えてぽきりと折った。

カチカチ、ぽきり。

「前回の続き、教科書は五十五ページ。抑制遺伝子の項からはじめます」

聞き取りにくい、新原の声はほとんどの生徒に聞かれてはいない。次第に拡大し始める私語にかきけられてゆく。

「カイコ蛾のまゆの色の、黄色遺伝子Yは白色遺伝子yに対して優性であるとありますが、これは……」

大声で話す者はいないものの、新原の声は教室の誰の耳にも入っていない。

みんなきつと、カイコのまゆとか言われてもピンとこないし興味がない。それはあたしも同意見だ。

あたしは少し顔を上げて改めて生物の教科書を見た。つるつるで、まるで人の触れた痕跡がない。写真の中の、白いカイコのまゆ。カイコって、そもそも何だっけ？ 蛾っていつからには虫なのか。まゆっていつのも分かるようで何なのだろう。成虫になるためのサナギみたいなもの、だったか。サナギじゃいけないのかな。まゆ、とわざわざ区別するには何か理由があるのだろうか。

どうして、サナギになってから成虫になるのだろうか。虫には幼虫から成虫になるものがあるが、はつきり分かれているのが不思議に感じる。

人間はサナギには籠らずに成虫 大人になる。それもまた不思議

議な事。

あたしたちは、虫だったら今どんな姿をしているんだろう。あの背の低い男子はまだ幼虫？ 居眠りしている前の席の子はサナギ？ 上背のある柔道部の彼は、成虫なのだろうか。それとも容姿は関係なく、精神が幼虫か成虫か、左右するのだろうか。

どちらにしても、あたしはどんな姿をしているんだろう。

熱心に教科書を見つめているように見える姿勢が続いた。

あたしの場合、知り合いが少ないせいで気のせいで終わる誰かからの視線を感じた気がした。気のせいだとは思いつつ、顔を上げた。誰とも目が合わない。あたしはやっぱり気のせいだったと教科書を見つめるフリに戻ろうとした。

新原の口だけの顔の角度がこちらに向いているような気がして気のせいだと思ふ事にした。

先ほどの事で目をつけられたのかもしれない。体育を休むほど体調不良なのに、次の授業を出るあたしがただのサボりと判断するにはこの四時間目の授業がもってこいだ。シャーペンを手に眉を寄せる。長く出す芯を、わざわざ折るように机に突きつける。ささいな音と芯が飛ぶ。

教科書に視線を落とす気にもなれなかった。頬を机にへばりつけて、突つ伏す。横目でシャーペンを見ながら芯を出す。長い芯は折れやすい。

あたしは芯がシャーペンの中からなくなったら、新たな芯を追加した。

体育の授業を休むのはやめた。

また新原に出くわしたくなかったからだだった。でも、一度だけあの第一理科準備室が新原の隠れ家なのかと放課後に見に行った事はあるが、たった一度、短い時間だけじゃ判断出来なかった。

けっきょくは関わりもないし、どうでもいい事なのだからそれでも構わない。

しばらくして、あたしは席替えで窓際の席になった。渡り廊下と中庭を挟んで存在する特別教室棟である第二棟が見える席だ。あたしは空を見るのが好きだから窓際の席に満足した。

空ばかり見ていた。

雲が流れるのを、その形が変わるのを、見上げていた。雨は好きだが、がちりした雲は動いてくれないのでつまらない。

晴れでもたまには空も嫌いになる。そんな時あたしは中庭を見ていた。庭なんていえないような、土の地面で草と木が生えているだけのような存在。楽しくはない。ただ目は正面より下を見ると疲れ目にならず楽だった。

あたしが雲と蜘蛛の名前の音が一緒な理由について考えていた頃、視界に妙なものが映った。

走る新原。渡り廊下を走る新原だった。

やる気と新原ほど似合わないものはない。走るといふ行為はやる気の表れに見える。あたしは机の上の教科書を見て生物が次の授業だという事を知る。教壇に誰の姿もない事も。

新原が授業に遅刻して走っている。まるで慌てているような構図だ、授業にも人生にもやる気のない人間のする行為には思えない。

あたしは知らないうちに教室の前のドアを見ていた。渡り廊下から消えた時間からして新原はもう教室にたどり着いたはずだ。

ドアに異変はない。あたしがちょっと眉にしわを作ると、ゆるや

かな速度でやつと扉が開く。新原だ。

「すいません、遅れました」

彼の声は珍しく申し訳なさそうな、感情ののったものだった。相変わらず、相手に聞かせる気がなさそうな低くこもったような声。

珍しいものだったから、あたしは委員長の起立の号令から着席まで、それに従いながらも新原を見ていた。

「今回は、新しい章に入ります。教科書は五十七ページを開いて下さい」

『遺伝子の本体』

黒板の上で、チョークの粉が文字をかたどる。

新原は授業を遅刻した遅れを取り戻すために走っていたのだろうが、何を思っただけで走っていたのか。

そういう行為は熱血教師のするものだとは知っているのか。

『グリフィスの実験、？加熱したS型菌をネズミに注射 発病しない』

教師が番書を始めると、一部の生徒がノートだけは取るうとシャーペンを走らせる。新原は書くだけ書いて説明を後にするタイプだから、生徒たちはノートを取る時だけ口数が減り、新原がしゃべり出すとそれに便乗するかのようには話し出す。

『？加熱したS型＋生きているR型菌をネズミに注射』

チョークの音、シャーペンの音が目立つ。あたしの手は動かない。いきなり菌とか、ネズミとか言われてもね。

教科書の図もどこか幾何学的で理解不能。親指が、シャーペンの芯を叩き出す。簡単に折れる芯を、力もなく折ってゆく。

今日の天気は曇り。あまり空を観察するには向いていない。あたしはもう一度、きれいな教科書の上に目を落とす。

『形質転換……生物が他から遺伝子を取り込み、その形質が変化する』

教科書の一文が黒板にそっくりそのまま書かれているのを見て、新原の教育にかける情熱のなさを知る。教科書に書いてあるから、

そんなに必死になってノートに書き写さなくてもいいですよ、周りの生徒に教えた方がいいだろうか。

ところどころ、教科書とは異なる表現や文章もあったがあたしにはあまり意味をなさないものだった。

粉だらけの白い手が、チヨークをすり減らしてゆく。

新原はドアの前で、息でも整えていたのだろうか。教室に入った時の彼は平然としていた。

『アベリー（エイブリー）の実験』

どっちだよ、その括弧閉じはなんだと思いつつも、あたしはシヤーパーンを持った手で顎を支えながらぼうつとしていた。

チヨークに染まった新原の手を見て、変装のためチヨークの粉で手を白くした狼の童話を思い出していた。

晩冬になると、新年度を予感させるようなプリントが配られた。

『進路希望調査表』

たった一枚、A4の紙切れで生徒の希望が分かるものだろうか。担任教師は、平田という男性教師だった。彼は世界史の教師でもあり、授業は単調だが教師としては可もなく不可もない。少なくともあたしはそう思っている。気さくではあるが過干渉はしない。ほとんど話した事がなく、平田があたしの事を知っているかも疑わしい。

どの教師ともあたしは話したいと思っではないが、平田との進路相談は期待出来そうにもない。

あたしには夢がない。将来したい事はない。

ただ、楽に暮らしたい。

第一、温室育ちの現代っ子が特別な体験もなしに高校生まで育って進路に自信が持てる方がすごい。好きなものはあるにはあるが、将来どうしたいなんていうビジョンはない。あたしにあるのはふわふわした意識だけ。ぼんやりと、輪郭を伴わない雲のようなものだけ。

あたしは一体、どうしたいんだろう。

進路希望調査表は白のまま、あたしはその場限りの将来の夢さえ

思い浮かばずに進路相談の日をむかえた。

「花野はまだ<sup>はなの</sup>、やりたい事が見つかってないんだな。悪い事じゃあないぞ。まだ若いんだ、いろんな事に挑戦してみる。やりたい事なんてすぐ見つかる」

どこでも聞けそうなセリフが平田から飛んで来た。まるきり面白にかけるそれは、テレビのインタビュー「楽しかったですか？」の答えが「楽しかった」だった事よりもありふれたもの。

プリントに書いた「ない」の二文字をない事はないだろうと怒りにも似たものをぶつけられるのではなくて、よかったといえばよかったのだが。

やりたい事が、見つからなかったらどうするのだろう。若い時間は短い。少年老いや早く、学なり難し。光陰矢の如しだ。

あたしは今日までの時間を、目的もなくただレールに乗ったように歩いてきた。何もしていないのに、一年が過ぎようとしている。

何も見つからなかったら、どうするのだ。

「でも少し、進路の方向性くらいは考えておいた方がいいぞ。こういうのも読んでみたらどうだ」

平田はあれこれ言った後、そう締めくくった。こういふのとおき差し出したのは、高校生が行く事の出来る進路先についての資料や、大学の学科選びの資料などだ。

この日の進路相談はあたしで最後だったので、平田は資料を重ねて残って読むようにしむけるかのように「読んどけよ」と言っただけで去っていった。

あたしと進路資料は教室に取り残された。

放課後に用事はなく、あたしは積まれた資料の一つを手取る。高校生の興味のありそうな身近なものから適正進路を導き出すものもあつたが、学問についてになると興味が薄れていった。文学、国際関係、総合科学、看護・保健学……キーワードを拾っただけでも疲れる。

一行もまともに読まずにあたしは資料を山に返した。

こんなものじゃ、何も導き出せない。

椅子に座りながら、首を背中につけるようにのばす。

空は　曇り。

空なんて飛べないと知ったらどうしたらいいのだろう。

教師が二人、中庭で土いじりをしていた。その中の一人に、あたしは新原を見つけた。相も変わらず髪の毛は瞳を隠し、何を考えているのか分からない。白衣は汚れて見える。

今ではもう、彼の瞳をまぶたの裏に描く事は全く出来ない。それが恐ろしかった事も忘れてしまった。彼について考える事もなくなったがよく新原を見かけるようになった。

今思えば、新原は準備室でゴミ箱相手に八つ当たりをしていたのだろう。彼なりに虫の居どころが悪かったのだ。そういう事もあるう、人間だから。理由らしきものも見つかる違和感はなくなり、薄れてゆく記憶はまるで消えてゆきそうでもあった。

新原は、階上のあたしには気がつかない。窓で隔てた建物の内と外だから当然だ。

もう一人の教師が立ち上がる。彼女はあたしのクラスの授業を受け持った事がなく、顔しか知らない。声は聞こえないが新原に何かを改まって話しているようだ。両手を合わせる。新原は口をほんの数ミリ開けただけで返事をしたようだ。女性の教師は二言三言何かを言うと、軽やかに中庭から校舎に入って行った。

新原は再び座りこみ、作業を続ける。どうやら春にむけて土を耕している、もしくは花の球根でも植えているようだ。あたしは判断する。

外はまだ寒く風がある日だった。新原の長い前髪がゆれるが、ここからではよく見えない。あたしは少しだけ緊張した。

女性の教師は戻っては来ない。彼女が新原一人に作業を押しつけ

たのは確定となった。

あたしは不機嫌になる。今のあたしなら、そもそもそんな土いじりを言いつけられても黙って欠席する。

でも、きつと前までのあたしなら……。

あたしは窓から離れると、鞆をひつたくって教室を出た。

新原に、あの教師はもう戻ってこないよ、と言つつもりはなかった。最初から彼女は後は全部よろしくと言って帰ったのかもしれない。それを承知で新原はあの場所に残っているのかもしれない。

でもそんな事あたしは知らなくていい。

まっすぐ帰って、早く寝よう。中庭に残された新原の事を考えないように。

学期末のある日、大掃除が行われた。あたしは指定された場所に向かいそこが第一理科室だという事を知り眉を寄せた。

新原が出ないといいなと思った。そしてそれは叶わない。

「準備室は私が掃除しますので」

彼はそう言った。クラスメイトは掃除の持ち場が減ったと喜んだが、あたしはただ新原の一人称が「私」だったのかとだけ思った。

ホウキを持って、窓際にかけてける、あたし。空は晴れ。雲はゆっくりと東へ進む。

こうやって空を見ていたら、いつか空に溶けたらいい。雲になっ  
てしまえばいいのに。きつと誰かは逃げとゆうだろう。現実逃避だ  
と。

でも、その時のあたしには考える事がいっぱいあって、若者が頭  
を悩ませる事をもっとちゃんと考えるべきかなとか、ちゃんとした  
友人が出来ないのはなんでだろうとか、おおよそ今を生きる人間  
の考えでいっぱいだった。

それらから、離れたいと思うのは悪い事なのだろうか。現実を見  
てないと。進路なんて決まらないまま進級が迫る。

考えるべき事はたくさんある。あたしはそれを考えたくない。だ  
からよそ見をする。その一つが新原かもしれないし、そうではない  
かもしれない。

あたしにはあたしの事が分からない。分からない事だらけだ。

したい事もない。

夢もない。

分からない。

あたしに一体何が残るのか。

教えてほしい。

誰も教えてくれなくていい。

チリトリは第一理科室掃除用具入れに一つしかなかった。あたしたちはチリトリを探して、新原の存在を覚えていたあたしはもしかしてと思い準備室に向かった。扉は掃除のため開かれている。それなのに少しだけ、緊張した。

新原は机にむかい座っていた。私物や書籍の様子から彼の机で新原の住処はこの準備室である事が知れた。

「チリトリを知りませんか」

びくりと新原の肩がゆれた。立ち上がると前髪の下からこちらを振り返る。

「あ、ああ……。そうか返していなかったか」

チリトリを拾い上げ、あたしに手渡す。

「……りがとう……ざいます」

わずか上ずった声が出る。そんなあたしの様子に気がつく新原ではなく、机にむかおうとしてももう一度振りむいた。

「窓の戸締まりだけよろしくお願いします」

必要最低限の言葉しか吐かない新原の、それでも必要最低限に入らないようなセリフだったからだろうか。あたしは返事をすぐには出来なかった。理由は思いつかない。

返事も立ち去りもしないあたしに、新原も何も告げず椅子に座りもしない。いつかのように、平均台の上に来てしまったようだ。

もしかしたら、あたしは新原に言いたい事があったのかもしれない。全くそんな気はしませんがその時はそう思えた。

新原にあたしに用があるようには思えない。きつとあたしの返事を待っているのだろう。だからきつと、あたしは何かを言うべきなのだ。

何を？

あなたこないだ目付き怖かったですよ、とか？

先日面倒な仕事押しつけられてましたね、か？

どれも彼はあたしに見られていたとは知らない事実だ。

「伝えて、おきます」

あたしはずっと前にかけられたものの返事をする、平均台からおりるように準備室を出た。

ホームルームは倦怠の素。平田の話は授業も含めあまり面白くない。  
ない。

用もないのにシャーペンを取り出す。

親指が間接的に芯を出す。それを繰り返して伸ばす細長い芯。短  
い時より、長い方が折れやすい。

あたしは考えた。これまでの事とこれからの事を。これからの事  
は何も思いつかないから、必然的に過去の走馬灯をたどる。

芯を折って、カイコ蛾の事を思い出す。繭は、一体何のためにあ  
るのか。繭は幼虫が成虫になるのに必要なのか。

白い手。

あたしは幼虫かサナギか成虫か。

白衣。

グリフィスの実験。

中庭。

気になったのは、午前中。準備室は新原の住まいだ。学年担当を  
受け持っていない教師は学校での机は各自準備室にある。

新原の八つ当たりの相手は、今はどんな姿か。あれ以来見ていな  
い。

先ほど見ておけばよかった。あたしは気になった。

ホームルームが終わったら、準備室前に居た。あたしは正面から入る事はしない。

また理科室から覗こうかとも思ったがあいにくと使用予定がないため施錠されていた。準備室には新原がいるかもしれない。留守を狙ってまたこればいいかもしれないが、今はいけないかもしれない。逡巡しているうちに、廊下の向こうに人がよぎった。新原ではないが、教師だった。見とがめる事はなくすぐ見えなくなったが、あたしはこんなところに何故いるのかと問われるのを恐れて気が急いだ。どうしよう。

あたしが準備室のドアに手をかけようとした時。がつん。音がする。

準備室の中からだ。あれは新原で、ゴミ箱でも蹴っているのだ。きつとそうだ。

あたしはその場を後にした。

新原は人畜無害でも草食系でもない。人間のように、怒りを発散させるのだ。おそらく彼以外誰もいないところで。

でも、あたしは知っている。

まるで弱味でも握ったような気分で、あたしは高揚感を得た。

ゴミ箱は蹴り上げられる。これまでも、これからも。

終業式。

あたしは下校前に、偶然下駄箱で新原とすれ違った。

「さようなら」

担任の平田にも口にした事のない挨拶をした。

新原は虚をつかれたような素振りだった。顔は見えないからよくは分からなかったけど。新原は髪に手をやり前髪をかき上げたりはせず困ったように撫でた。

「さようなら。新学期に」

それはただの挨拶。再会を願う言葉などではなかった。

あたしは新原の前髪が上がるのが見たいような気がしていた。見なければよかったと思っていたのを、忘れていた。

しかし彼はその手を下げて「それでは」と去って行った。あたしはそれに従って踵を返して、思い出したように振り向いた。

長い髪、白衣の背中。

ああ、きつと新原もま繭の中にいるんだ。

ふとそう思った。

あたしはふわふわ、適当な感情で考えるけど、それはあんまり間違っていないんじゃないかなと思えた。

理由なんてないけど。なにしろ世の中分からない事だらけ。あたしは自分の事もよく理解出来ていない。

白い壁に阻まれて、その中にこもっているのだから。

外の世界は分からない。

自分の事も分からない。

まずは繭の中から知っていこう。

もしかしたら、何か分かる事があるかもしれない。

何か理由が見つかるかもしれない。つかなくてもいい。

下駄箱から靴を取り出すと、内履きを叩きこむ。勢いよく下駄箱の扉を閉じると、騒々しい音がした。

力を発散させたせいかすっきりして、あたしは靴をつっかけ飛び出した。

走りだしたい気分。

空は曇りで、密集した雲がうつとおしかったけど、たまに嫌いな風景は、たまに好きにもなれるから、まあ、いっか。

おわり

## 5 (後書き)

ここまで読んでくださり、ありがとうございました。

この話は教師と生徒の恋愛ものが書きたかったのですが、恋愛のれの字も出せなかったので現在続編を考え中です。よろしければ感想をいただけたらなんて思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2829s/>

---

繭の中の教室

2011年4月16日00時25分発行